

# 【平成二十二年度大会企画より】

## 講演 「授業を創る 授業を楽しむ」

—— 大村はま国語教室から学んだもの ——

甲斐利恵子

今日のお話は「授業を作る」「授業を楽しむ」というものです。私はいつも根拠のない物言いをする性格なものですから、「授業を楽しむ」ということに偏っても問題ないと思ってしまうがちです。そのようなことに気を付けつつ、「私が授業を作るうえで大切にしていることとは何なのか」「自分はどのようなことに気をつけて授業を行っているのか」という具体的なことを語って、大村先生から学んだことをお伝えしたいと思います。

最初に言うべきことは、大村先生の名前を冠しているからと言って私の実践が大村先生と同一のものではないということです。大村先生が出された国語教室通信と私が資料としてもって来たものは、形態が同じに見えたとしてもまるで別物です。大村先生と私の実践がイコールではないということを始めにお断りしておきます。

さて、資料のページから順にお話ししていきます。私は光村図書という教科書会社の編集に携わっています。その教科書会社が出している広報誌に国語教育相談室というコーナーがあって、教師力講座の連載を行うことになりました。最近現場

に出ている多くの若い人たちが悩んでいることに対して現場のベテランの先生が答えるという形式です。

年齢と自分の立場を踏まえてこのコーナーを引き受けることになったのですが、質問がなかなか来ません。「質問はいつ来るのでしょうか」とお尋ねしたら「若い人たちからの質問も先生がお考えになるんですよ。若い人たちの悩みまで想定できるという力量があると見込んでお願いしたんですからやってくださいね」と言われました。

そこで一人芝居のように考えたのがこの質問です。読んでみ

ます。  
最近、国語教師として不安になることが多くありました。生徒たちのつまらなそうな顔を見るとつらくなります。国語の教師になってよかったなと思うのはどんなときか、どうやったら生徒たちは楽しい顔になるのか教えてください

なぜこれを第一回目を持ってきたかと言うと、「国語科とい

う教科はどういう教科なのか」という問いを立てたときに、自分の中にある国語科の基本がどのようなものか表現したかったからです。続きを読んでみますね。

いきなり大きな問題に激突しましたね。生徒たちのつまらなそうな顔を見るのは本当につらいですね。わたしにもそんなときがありました。この状況を一気に打破するようなことにはならないのですが、あるささやかな場面を思い出したのでお話しします。数年前の職員室でのことです。私は生徒の書いた作文に夢中になっていたようです。文章に反応してちよつとつぶやいていたのかもしれませんが。すると、すぐ近くにいた数学の先生が、わたしに向かって言いました。「いやなあ、甲斐さんは。国語の教師って、年がら年中生徒と話してるようなもんでしょ。こっちは教えなきゃいけないことが多すぎて生徒の気持ちなんて全然掴めないし、分かたかわからないかが見えるから厳しいんだよね。」じゃあ何ですか。国語は教えなきゃならないことなんてちつともなくて、生徒が分かつたかどうかなんて関係なくて、数学と違って甘くない世界なんですか。と、反論してもよかつたのですが、そこは穏やかに応えました。「ほんとですよねえ。国語科っていい教科ですよねえ。」これはかなり本気で発言しました。生徒たちの書いた文章を読んで、こんなことを考えたのか、これはないでしょ。こういう意見を言うなんて君もただ者ではないな、なんて。こんな楽しいひと時を過ごせるなんて、やはり国語科ならではのことではないでしょうか。では、『年

中学生と話しているような』状態になるためには、どのような必要があるのてしょうか。先ほどの作文の例に限って言えば、生徒が本気で書いてくれているということが挙げられます。この学習では生徒たちが本気になるために、まず、書きたくなるための準備をしました。先輩たちの書いた意見文を紹介して、先輩の言いたいことを一文で要約してみようという学習をしました。また、タイトル例をたくさん示したり、書き出しの例を印刷したり。もちろん、その準備をせずに楽しいひと時がやってくるはずはありません。「書きたい」「話したい」「聞きたい」「読みたい」という学習への意欲を作り出すという発想を持たなければなりません。そのための果敢な挑戦を試みることから始めてはどうでしょうか。毎回同じような授業をしていけば、生徒たちは同じような表情を見せるでしょう。つまらなそうな表情を予想して気持ち沈むより、こんなこと、あんなことと考えていた方が教師の表情も明るくなるはずですよ。自分が楽しくないことを楽しめとは言えないですよ。じゃあ、自分が楽しければいいんですよ、なんて言っはいいけません。どんな力を育てようとしているのか目標を明確にしつつ、その目標にこの教材が相応しいかどうかを吟味することや、そのための「手びき」を具体的に考えることも必要です。そう考えると、ホントにやりがいのある仕事ですね。生徒たちは「自分を伸ばしてくる教師」が好きなのであって「おもしろい」とか「優しい」というだけでは、ついて来ないものです。生徒たちが「書きたい」「話したい」「聞きたい」「読みたい」と思うには

どうしたらいいかを考えて、授業を組み立ててみてください。  
大変だけどきつと楽しい仕事になるはずですよ。

生徒たちは「自分を伸ばしてくれる教師」を求めているのですね。生徒自らが「○○したい」と思うように、まずは教師自身が見やすい表情で楽しんでやりましょうよ。

といふうちに書きました。第一回目ということで自分が国語科と言う教室をどのように運営していきたいかに触れました。何はともあれ子どもと楽しく過ごしたいというのが一番の目的です。子どもと楽しくかわるためには、必ずプロとして仕事の責任を果たすという覚悟がなければなりません。子どもたちは、楽しい、あるいは優しい先生がとても好きです。でも優しいだけでは子どもたちの力を伸ばすことはできません。例えば子どもがすごく悩んだ顔をしていて「どうしたの」と聞いたら「元気がないの」と答えたとします。教師としてその子を一生懸命励ますということも確かに大事です。でも、その子が抱えている問題は何か、何に躓いているのか、そしてその子の性格や背景を踏まえたうえで、具体的にどのようなことが対策として立てられるかを述べられなければなりません。「そうなの。でも頑張りな。そう、前を向いて生きていくのよ。へこたれちゃだめ。元気が一番。」こんな励ましはお母さんでもお父さんでも近所のおじさんでもできる。そういう仕事を私たちはしているわけではないんです。

大村先生の有名なエピソードにこのようなお話があります。

大村先生には大変よくできるお姉さんがいました。あるとき二人は浴衣を着て出かけた後で、家へ帰ってきて浴衣を脱いでたもうとしました。お姉さんはすごくきれいにたためました、はまちゃんもどんなに一生懸命にやってもきれいにたためません。（お姉さんはあんなに上手にできるのに）と思って切なくて本当に泣きなくなってしまうその時に、お母さんがすつと通りかかりました。「どうしたの」とお母さんが尋ねると「これがたためないの」とはまちゃんが泣きそうになりながら答えます。「はまちゃん、裾を持つよ」とお母さんは言ったそうです。襟の方から一生懸命たんでも浴衣ってそろわないんですね。一番きちんとそろえられるところが裾なんです。裾を持ち上げれば長方形のきれいな四角が出来上がる。その時にはまちゃんは思ったそうです。「ああ、お母さんってすごい」って。「お母さんの言うことを聞いていたらできるようになる」。

うまくできなくて切ない顔をしている人に向かって「がんばってたたむのよ。後ろ向きになっちゃダメ」って言ったって浴衣はたためないですよ。ね。「裾を持って」と言える教師になりたい。そういうふうには大村先生は思ったそうです。つまり、子どもが何で躓いているのかを見極めたうえで、どうすることが先へ進むことなのかを言えなければ、教師としての仕事をしたことにならないのです。

授業中、作文が書けなくてぼんやりしている子や、私が横を通ると書いてあるふりをしてごまかして、何字か書いてみて、通り過ぎてちらつと見ると書いた何字かを消している子があります。切ないですね。そういうとき「裾をもって」という言

葉が私の頭の中で響いてきます。「裾を持って」と言えないなら仕事をすることにならない、と自分に言い聞かせながら、子どもの作文用紙に「こういうことかな」って書いてあげるんですね。そうすると子どもがはっとした顔をして、続きを書き始めます。そういうとき「裾を持って」と言えたと感じられてすごく楽しい気持ちになるんです。あるいは小学生に日記の続きを書くように促す場面でも、「昨日あったことをよく思い出さない」と言うのではなくて、「昨日テレビ見た？」とか「お母さんとけんかしなかった？」と尋ねてみます。「裾をもつて」と言うことはどういうことなのかを考えて、「思いださない」と言うのではなく思いだす切り口を差し伸べる、それが仕事をしているということです。私たちはただ単に、子どもたちに元気でいてほしいという願いを持つだけでは仕事をしたと言えません。このようなことを常々やっていたいと思っています。

では二ページをご覧ください。一生懸命にやろうとしたときは見返りを期待するものです。ところがそうそう世の中はうまくいかないもので、一生懸命やろうとしていても子どもたちはそんなにうまく右から左へ、左から右へ向いたりしないものです。そういうときにどういう心持ちでいたらいいかを考えて第二回目のことを書きました。「生徒の一言一言を受け止めて受け流す」この原稿を一生懸命書いておりましたら、私の夫が「流行に敏感だね」と声をかけてきました。それで私が「どうして流行に敏感なの？」と言ったら「あれ？ムーディ勝山知らないの？こういうふう流行りにのって今を生きていると子どもも若い先生も喜ぶね」と言ってくれました。私はそういうつも

りで書いたわけではないのですが、ムーディ勝山と私には違いがあります。受け流すだけではなく、その前の段階で「受け止めて」というところが大事なんです。それでは読んでいきますね。

つい先日のことです。これからの単元を説明している時、いつも反抗的な態度を取りがちな生徒が一言「なんでそんなことしなきゃいけないんだよ」と聞こえよがしに言いました。工夫して頑張ろうと思っていた時だけにすごく傷ついてしまい途端に自信がなくなっていました。こんなときどのようにすればいいのでしょうか。

いろいろ工夫して新しい単元に取り組むときは、教室に入るときでさえどきどきしてしまうものです。はたして生徒たちはやる気になってくれるだろうか。とても気になるものです。そんなときに言われてしまった一言に傷つくのは当然です。中学生は本当は一步先に進むことを切望しているのだと思います。自分を深く理解し、成長させてくれる人を求めています。前回も述べましたが、生徒たちは自分を成長させてくれる人が大好きです。マンネリが大嫌いなくせに、新しいことには用心深い。幼い子のように言われたとおりにんでも「わーい」というわけにはいかないものです。「大丈夫なのかよ」と声に出しても常に「大丈夫なら頑張る」という気持ちで根底にはあります。説得力を求めているのです。生徒の一言一言に対して「そんなの気にしない気にしない」と片づけ

てしまうこともできます。が、それよりはむしろ、その一言をしっかりと受け止めてみるというのはどうでしょうか。「受け止めて、受け流す」のです（なんだか禅問答のようになってきましたね）。では、「受け止めて、受け流す」にはどうしたらいいのでしょうか。私の若い時の実践を紹介してみましよう。確か外来語の単元でした。大村はまさに懂れていた私は、「よし、今度の単元は生徒一人一人に別々の教材を用意しよう。」と意気込んでいました。野球部の生徒には野球の新聞記事、テニス部の生徒にはテニスというように、一人一人の顔を思い浮かべながら対話するように、教材を用意しました。ドキドキしながら教室へ。案の定、生徒たちは大喜び。渡された封筒を覗き込む嬉しそうな顔。何とも言えない暖かい雰囲気がありました。ところが全員に封筒を渡し終えたとき、もう学習を始めていた生徒が「何調べるのー。」「カタカナ語と外来語ってどうやって見分けるのー。」「外来語を抜き出した後どうするのー」と矢継ぎ早に質問をしてきます。最初に「外来語を抜き出して自分の考えをまとめなさい」と言っていました。にもかかわらず、生徒は質問してきます。「だから最初に言ったでしょ。抜き出してそれを見て、自分の外来語に対する考えをまとめるのよ！」生徒たちは、自分だけの教材を手にしてうれしかったのだと思います。しっかりと学習しようと思っただけだと思えます。その結果、次の一言が聞こえました。「なんだこれだけか。つまんねえー」私は深く傷つきました。まったく恥ずかしいことですが、そのときの私は、「一人一人の教材」を準備した自

分に酔っていました。この工夫を支える根本的な目標の設定が曖昧であり、どんな力を付けたくてこの工夫をしたのか「説明の言葉」をもちませんでした。だから、生徒の言葉に動揺し、漠然とした不快感で深く傷ついたのでと思います。結果は悲惨でした。一人一人短いながら発表をしました。ほとんど全員が「外来語が、いっばいあることに気づきました。これからも外来語に注目していきたいと思えます。」という内容です。今も「異口同音」と言う四字熟語を見ると悲しくなるのは、このふがいない実践があったからでしょう。この経験から、私はしっかりと「説明の言葉を持つべきだ。」と痛感しました。どんな力を付けたいのか、その目標にこの教材は相応しいのか、有効な学習を実践するための手引きになり得ているのか。常に自分に問いつつて学習を組み立てていかなければなりません。「説明できる言葉」をもって初めて、生徒の成長したい思いはしっかりと「受け止め」て、不快感で傷ついたり動揺したりすることなく「受け流す」ことが出来るのだと思います。生徒の一言一言を真正面から受けて、傷つきすぎたり、落ち込みすぎたり、得意になつたりするのはやはり要注意です。日頃から私たちは、生徒を受け止めようとする習慣と同時に、常に「説明できる言葉」をもって受け流す強さが必要で

「なんでこんなことするのー。」と言う言葉に傷つかず無視もせず、これからの学習をきちんと説明できたらいいですね。もちろん毎回生徒に説明しなくてもにっこり笑って、「あと

でわかるのよ。フッフ。」と言ってみるのもかっこいいかも  
しれません。生徒たちは先生の真摯な姿をきちんと見てくれ  
るものです。笑顔で共にならばりましょう。

と、書きました。一生懸命やっているとすぐに見返りを期待  
したくなくなってしまう。小学校の教材にある「ごんぎつね」  
のようなものです。ごんが一生懸命に栗やキノコを運んでも、  
兵十は「神様の仕業か」と考える。ごんは自ら気づかれないよ  
うにしているのに「神様の仕業だ」と思われるととても残念  
がります。

私は「ごんぎつね」を読むたびに（こんなに一生懸命頑張っ  
ているのに誰も認めてくれない）という気持ちに強く共感して  
しまいます。本当は寝る間を惜しんで私が努力しているんだか  
ら、あなたたちだってがんばりなさい！と生徒に叫んでしま  
いたい。でも熱血教師が嫌われる由縁はそこにありますよね。熱  
血であるが故に押しつけてしまう。自分の頑張りを押しつけて  
しまうから、中学生から呆れられたり、愛想を尽かされたよう  
な目で見られたりしてしまふ。見返りを期待してしまふとつら  
いことが後からやってきます。そうではなくて、見返りが来な  
かったのはそれなりの準備をしていなかった、と自分を叱るし  
かありません。もちろん教員は規範意識を育てなければならな  
い立場ですから、どんなに授業がつまらなくても騒いだりする  
のは生徒の本分ではない、と言うべきときもあるでしょう。し  
かしやはりそういうことがないように、一生懸命やったことが  
成果として現れるように、私たちはしっかりと勉強しなければな

りません。熱意だけでは子どもたちに良い授業をすることは  
できない。勉強を続けなければ本当の意味で楽しさはやってこ  
ないですね。今日は「授業を楽しむ」ということがテーマです  
が、やはりそこに楽しさを支えるものがなければならぬ、と  
お伝えしたいです。

では三ページ目をご覧ください。これは私の教室で出してい  
る国語教室通信ですが、やはり大村先生のものとは全く異なる  
ものです。大村先生が出されていた通信をご覧になったことが  
ある方はいらつしやるでしょうか。あまりいらつしやらないみ  
たいですね。大村先生の教え子だった方に苅谷夏子さんとい  
う方がいます。大村はま国語教室の会の事務局長をなさっている  
のですが、彼女が書いた「評伝 大村はま」が小学館から出版  
されました。その評伝を読むと、大村はまがいかに国語教室に  
命を懸けていたか、戦争に加担してしまったことへの自責の念、  
そして子供たちが民主主義を実現していくために、いかに自分  
を追い詰め授業を作り出していったかということがありありと  
描かれています。そのような思いが反映された大村先生の通信  
はとにかく重厚なんです。

私の生きた時代は高度成長期で気楽な時代だったので、大村  
先生のように命を懸ける国語教室にはとてもなれませんでした。  
時代の切実さというのは全くないのですが、最近一年生に  
対して「和の心」という単元を行いました。授業の際には、種  
まきとして単元の始まる何か月前から「和」のおもしろさを  
小出ししていきます。これは大村先生のまねでして、子ども  
たちが「本気で読みたい」「本気で書きたい」と思うための準

備になります。授業に入った時にはすでにその中身を知っている、あるいはその授業の中身に入りたくて仕方ない人たちがいる。そういう教室を作っていくためにはそれなりの準備が必要なのだ、というふうに大村先生はおっしゃっていました。「和の心」というスタジオジブリの方が書いた本がありましたので、その紹介を行ってみました。

では左上のサラリーマン川柳の欄をご覧ください。なぜ私が大村はま先生と決定的に違うのか、ということなんです、ここにあることに私が生徒を笑わせたくなくなってしまふからなんです。ご紹介します。

「さからわずいつも笑顔で従わず」

この川柳はすぐ笑うタイプの子と、「どういふこと？」と首をかしげるタイプの子もいるんですけど、わからなくてもいいのよ、と言いながら紹介を続けます。

「頑張れよ無理をするなよ休むなよ」

この句を読むと私自身衝撃を感じてしまいます。

「足ふまれむつとするけど俺好み」

生徒はこういう句が大好きですね。それから、

「ボデイコンを無理してきたらボンレスハム」

「運動会抜くなその子は課長の子」

「床屋行く金暇あれど髪がない」

「親の夢次々消して子は育つ」

「陰口をたたく奴ほどこまを摺り」

「恋女房いつか知らずに肥え女房」

「会議中うなづくものほど理解せず」

「お茶入れた腹が立つから指入れた」

生徒たちとわあわあ騒ぎながら「先生これひどいね！でも指入れたら熱いし入れる側も大変だよね」などといって笑いあいます。教室でこのようなことを言いつつ笑う大村はま教室というのとはなかつたと思います。こんなふざけたことをやっている大村先生なんて想像もできません。でもこんなふうに一時間に一回はみんな笑いあえる時間が流れていると、子どもたちは心を開いてきます。もちろん先ほども言ったようにただ授業がおもしろおかしいだけでは子どもはついて来ません。でも国語教室が教科書とノートと板書だけというような世界である限り、子どもたちはそこに閉塞感を覚えます。先ほども申しあげたように、同じ授業をしている限り子どもたちは同じ表情しか見せません。私はその同じ表情を見て「この子は、国語が苦手なんだな」「この子は国語が得意なんだ」という子どもたちが一番嫌う決めつけをしてしまふわけです。そういうことだけでしか子どもを見られなかつたら本当に悲しいですよ。教師であるなら、子どもの悪い所も良い所も丸ごと受け止めてやれるという気持ちでいなければなりません。言葉を育てようというときに、まず子どもの心が開いていなければ子どもたちは真実の言葉を口から出すことはないんです。子どもが「きつと先生はこういうことを言う」と良い評価をしてくれるだろう」と考えて、感じたことを伝えるときも何かバイアスをかけてしまうというのには悲しいですよ。本気で何かを語る、本気で何かを考える、そのための言葉が生まれてくるためには、その教室にいる集団が気持ちを許せる集団である、知的なことに興奮する集

団である、そしていろいろなことを受け入れられる集団である必要がある。そのような集団作りをしていかなければ私たちが本当の意味で言葉を育てることはできないのではないのでしょうか。授業を自分が楽しむという基本的な姿勢がない限り、やはり子どもたちも気持ちを開いて何かを学ぼうという気持ちにならない。それが今日のタイトルに託した私の思いでした。

さて四ページから具体的な授業の内容に入っていきます。先ほども申しあげた「和の心」という単元をどのように授業したかがわかるようにしたいと考えて資料を持ってまいりました。授業をするとき、私は子どもたちに必ず授業のスタートとゴールを説明するようにしています。私自身、小中学校の時の国語の授業中「なんでこんなことやっているのかなあ」「この授業はどこに向かって進んでいくんだろう」と思うことがよくありました。そういった経験を踏まえて、この時間には何をするのか、どの資料を使うのか、何時間を使ってどんな活動をするのか、ということを引きちんとわかるように子どもたちに説明をしています。最近アカウンタビリティ、説明責任と言う言葉が話題になりましたが、この言葉は政治家だけのものではないと思います。教師も子どもたちに何を学んでいくかということを通じていいのではないか、そういうふうと考えていましたら、大村先生はずっと以前から学習の手引きというプリントを出していました。学習には道筋があり、ゴールはここにたどり着けばいい、というように子どもたちが学習をイメージして取り組める、それが学習の手引きのねらいです。

私のプリントには学習の目標が書いてあります。大村先生は

目標なんか子どもに伝えるのはみつともない、そんなこと言わなくなつて一生懸命やっていたれば必ずと目標に到達できるものです、とおっしゃっていました。その言葉を思い出しつつも、目標は子どもと共有し合いたいと考えています。「和の心」の単元の目標は、「話し合う力を付ける」「わかりやすく説明する力を付ける」というように設定しました。話し合う力を一年生の一学期の段階でつけておきたかったんです。つまり自分たちが何か考えを持つということと同時に、それを表現するという学習をします。さらにその表現は自分一人の力で生まれるのではなく、話し合いの活動ができる集団の中にいるからこそ生まれるものであるということを早い時期に学ばせたかった。例えば、学校に行かなくてもとても優秀な家庭教師をつけて子どもが東大に入れるような学力をつけさせる、という学びもあるでしょう。でもそういうことを私はねらっているわけではありません。人から学ぶ、人と学び合う、意味ある他人がすぐ近くにいる、そういうことを教えたいんです。教室の中で、この人がいたおかげで学ぶことが出来た、この人の意見を聞いて気づくことができた、というように学校で学ぶ意味を体感してもらいたい。人って面白い、つながっていくって楽しい、ということを授業を通して教えていきたいです。

話し合うという最も基本的な力をつけるためには、どうしたら話し合いが成立するかということを考えて授業をしなければなりません。大村はま方式ですと六ページのような台本を作って話し合います。例えば話し合いのために必要な役割として司会者がいますね。司会者としてどのような仕事をすべき

か教えなければなりません。始めの挨拶であれば、「明るく張りのある声でやるんですよ」という指示を出しても、生徒たちは実際に明るく張りのある声を出してみないと先生が思うようにはできません。そこでわざと張りのない声でやってみなさいと生徒に言うと、みんなそろってまのびした味気ない話し方をしてみせます。「こんな声でやるとやる気なくなっちゃうよね。じゃあ張りのある声でやってみましょう」と言うとはりきりすぎた生徒が「自分が司会をやりたいです」と力の入りすぎた話し方をして教室に笑いが起こったりします。

他にも司会の仕事として六ページの右下に「議題を知らせる」というものがあります。「議題を知らせることが大事です」とは誰にでも言えます。けれどもそれを実際にどのような言葉にすることが「議題を知らせる」ことなのか、ということとは教えないと幼い人たちはわかりません。教えるべき内容、中身、具体的な事例を常にセットで提示できなければ「楯を持って」と言うことにならない、ということを台本に示しています。具体的には、司会者は時間への配慮をすること、発言のルールを決めること、話が脱線したときには軌道修正が必要であること、などです。実際に話し合いをするときには、話し合いの枠組みだけでなく話し合いの中身がきちんとしていなければなりません。形式と内容という両面を私たちは教えていけないといけない、そこは骨の折れるところだと思います。そのようなことを踏まえて五ページの発表会を行いました。

七ページから八ページが説明文を読む授業についてのプリントです。説明文を読む授業といっても色々な力をつけることが

できますが、私は一年生の初めの段階で「問いを立てる」という力をつけることを目指しました。大人子どもに問わず「問いを立てる力」が育てば必ず考える力が付きます。茂木健一郎さんいわく、脳は問いを聞くと必ず答えを出そうと働くものなんだそうです。だから、授業をしていて「ごんはどんな気持ちだったでしょうか」と問えばその瞬間に子どもたちは考え始めるわけですね。問いかけること自体は脳を活性化しているのだからそのやり取りは決して無駄ではありません。しかし、本当に物考えるためには、先生が発する問いの答えを探すのではなく、問いがない状態から問いを立てていくという作業が必要です。具体的な事象に意味を持たせるためには、そこに問いがなければ中身を充実していくことができません。

説明文は問いに応える文章だということに思い至りました。例えば百科事典は説明文の典型です。授業の際には、中学生が知らないであろう「七輪」という言葉で練習をしました。「七輪」を百科事典で調べますと、「江戸時代中期家庭で使われた炊事道具」と書いてあります。その文章の中には「七輪の使用はいつごろから始まったのか」と言う問いがあるわけですね。これは説明文の授業に使えると思いました。

小学校の文章にはちゃんと問いが書いてあります。しかし大人の読むほとんどの説明文の文章には問いが書かれていません。「筆者が説明しようとしている事柄を読み取るために、クジラの飲み水という文章にはどんな問いあるのだろうか。クエスチョン・アンド・アンサーで考えてみよう」という言い方をすると子どもたちは喜んでくれます。「クジラの飲み水を勉強し

ます。何ページを開いて。一段落から読みましょう」といって子どもたちは盛り上がりません。言い方を少し工夫するだけで生徒たちは好奇心をくすぐられます。自分から「どういうふうにやるの？」と尋ねてきてくれるのです。そうしたら「必ずクエスチョン・アンド・アンサーを含めてパンフレットを作るのよ。イラストを入れてもいいね。一番大きな問いはなにかしら」と答えつつ授業を展開していきます。「クジラの飲み水」という文章は、「クジラはどのようにして飲み水を得ているのだろうか」という一番大きな問いを柱として設定して、その問いに對してさらに具体的な問いを立てて説明してあるから、それをまとめてみようと言って作ったパンフレットがこれです。子どもたちは絵を入れたり、レイアウトを考えたり、字の大きさを考えたりしながら、文章を見やすい情報へと変えていくという作業を通して、問いと答えの関係を読み解いていきました。七ページの作品は良くかけているものを採用しましたが、他の作品も様々に工夫がしてあって楽しい学習になりました。作品をいくつか選んで印刷して子どもたちに見せると「だれだれさんはこんなことを思いついたんだ」「この作品はすごいなあ」と感想を言い合います。子どもたちはお互いから得られる評価が大好きです。先生の言うことはあまりよく聞かなくても、子どもたちの中から生まれた意見には良く耳を傾けます。

何を教えた方がいいかしっかりとしていれば、子どもたちの作る作品や考えた意見はとて面白い教材になります。こうして子どもたち同士の横の関係作っていくことも私たちの大事な仕事のひとつです。単元学習のような一人一人の個性を出す授業をしてい

ると、自然と子どもたちの横の関係を作っていくための契機が生まれてきます。一人一教材を作ることで単元学習が成立するのではなく、子どもたち同士をつなげたいという強い思いが単元学習という方法につながったのだと思います。大村先生自身も、単元学習を行いたかったというよりは一生懸命やってきた結果が単元学習であった、という言い方をしていました。もちろん私は大村先生を目指してはいるのですが、一番強い気持ちには子どもたちをなんとかして育てたいという思いです。だから大村先生を目指していても、大村先生とは違った授業ができれば本当の意味では大村先生になることはできないと考えています。それが私の大事にしていることです。

そのようなことを考えながら授業をしたのですが、授業の後中学一年生の子が言いました。「今度の学芸発表会でクラスの出し物をどうするかって話し合いがあるんだけど、どういう問いを出したらちゃんとした話し合いになるのかな」さらに話をしていくとそもそも文化祭は何のための行事なんだろう？と言いつつ始めたりますんです。国語科でやったことが確かに学校生活を豊かにすることにもつながっているんだ、という実感がありました。そのような仕事を私はしたかったのだと改めて気づいたんです。授業でやったことが実生活の中で語彙として出てきたときに、授業でやったことが定着したと感ずるので、やはり意図的に生徒の生活に定着するような単元を作った方がいいでしょう。

八ページをご覧ください。わかりやすい説明文を書こうというのが次の単元です。問いを立てるのが大事だということを

験した子が、実際に自分が問いを立てて書いてみる。すると文章を書くときにはそこに問いがあつて初めて説得力が出てくるということが教えられるのではないかと、思つて行つたのがこの説明文を書かせる単元です。このような単元をしていると、活動ばかりさせていたらテストができないのではないですか、という人もいます。しかし、つきたい力がある限り必ずテストは可能です。授業の中で何の力をつけているかをしっかり考えておけば、その力に応じたテストを作ることが出来ます。その例が九ページにある「テストの前に」というプリントです。下段に「クジラの飲み水」の発展問題として「問いを見つける、問いを立てる力」について問うということが書かれています。復習としてパンフレットを見直しなさい、問いを見つける学習を振り返りなさい、という指示があります。十ページをご覧ください。五番の問題です。文章の中から問いを見つけて書き出す問題、文章をパンフレットに書き換える問題を題しています。問題文はポブラディアと百科事典を参照して「ラクダ」という文章を自分で作りました。決して活動をしているために評価が出来ないとは言つてはいけない、力をつけるためにやっているのだから、必ずその力がついたかどうかは判断することが出来る、ということを自分に課してテストを作るようにしています。

最後の二ページは、今現在出ている十回の教師力講座のうちの八回目で、授業の具体的な例が書いてあります。「ウソ日記」という活動の紹介で、いかに私が楽しむためにやっているかがよくわかる活動です。内容は、新出漢字を必ず使用して十分以

内に嘘の日記を書く、というものです。十二ページでは「言葉の小劇場」の紹介をしています。「少年の日の思い出」を例として用いました。「色あせる」「身にしてみる」といった文章の中に出てくる言葉を使って、百字の作文を書くという活動です。その言葉を理解して文章を読むのと、この言葉を知らずに読む人とは、読む力が全然違つてきます。ですから是非とも言葉を習得してから文章を読ませたい、という思いから始めた活動です。小さな作文ではありませんが、「色あせる」という言葉を使って実際に文章を書くことで、言葉が生活言葉・使用言葉になつていくんです。その語彙を持つたうえで「少年の日の思い出」を語り合いたかつたんですね。それでこのようなことをしてみました。

それから左側の万葉集の教材は「コメントで読む万葉集」と題しました。万葉集の解説などいろいろな資料を与えて、ポストイットに自分が選んだ歌のコメントを書かせました。生徒は資料を見て「こんなの難しくて全然読めないよ」などと文句を言うんですけど、「一行書くだけでいいのよ」と言うやうな気を出してくれます。そしてコメントを書き終つた生徒には、ポストイットを黒板に貼るように言います。たくさんコメントが黒板に貼られていくと、友達のコメントをちらつと読んでみた生徒が「自分のコメント、ちよつとやり直してきます」と言つて自分から書き直そうとしたりします。友達のコメントの場所をわざと入れ替えて、自分のポストイットが目立つように貼りかえるような子もいます。おもしろいのは、資料を読むこととポストイットを黒板に貼る作業を同時に行つていても

決してうるさくならず、教室が静かだということ。書くことをコンパクトにすることが大事なかもしれない、と思いましたが。鑑賞文を書かせる時間も大事だけれど、物語そのものを理解しながら楽しむ時間もあっていい。春過ぎての歌についてのコメント、「夏が来ちゃったのかあ」。これだけで良いんです。子どもたちは何字以上書きなさい、という嫌がるのに何字以上書いたらだめですという喜びます。

「緑と白のコントラストが美しい」

短くてもきちんと読めてますよね。

「きっと空は真っ青だろうなあ」

「女性の天皇だったのか」

持統天皇は男だと勘違いしていたりするんです。それから下段の「東の」の歌についてのコメントです。

「雄大な景色」

「ナイスロケーション」

「夜更かしなの？早起きなの？」

「なんと地球的。高い建物がない時代だ」

子どもたちの作品を読んでいると、楽しんで和歌を読めたんだなあと感じられます。与えた資料は指導書の資料をそのままコピーしたもの、というすごい授業でしたがみんなラインマークを引きながら一生懸命読んでいました。こんなふうに私は毎日授業を作りながら楽しみつつ過ごしています。ありがとうございます。

（平成二十二年十一月二十七日、於埼玉大学）

付記：以下に掲載する資料は、発表用資料の三ページから十ページまでの分です。



# 和のこころ 「お盆」

各席（ ）

## ■発表のてびき■

1 司会 これから、「お盆」について発表します。よろしくお祈りします。  
では、最初に甲斐さんから発表します。

2 甲斐 私は「送り火」「迎え火」について説明します。

Q 迎え火・送り火はいつ、どのようにして行うのか。  
A 八月十三日・十六日精霊馬、支那間・祖先の霊  
↑何を説明するか  
↑キーワード

これは何だか知っていますが、(キヌワリの神話) これは精霊馬として、お盆の入り日の八月三日に玄關前の敷地や盆などに置いておくものです。精霊馬は、「先祖の霊が自分の家へ帰ってくるための乗り物で、キヌワリや茄子に足をつけてたのです。キヌワリ馬のように早く戻ってきてください。茄子は送り火をゆくりゆくり焼つけてくださいという願いが込められているそうです。十三日の夕方には迎え火をたいて、一足拒絶が済むまで焼つけてくるための目印にします。また、送り火は八月十六日に迎え火と同じように火をたきます。一先祖霊があの世へきちんと戻れるように運を照らすためものです。京都では「五山の送り火」と呼ばれる大がかりな送り火がたかれます。(山の輪と大という字)

3 司会 では次に甲斐川さん、どうぞ。

4 甲斐川 私は「お盆参り」について説明します。

Q お盆参りは何のためにするのか。  
A 一先祖霊・留守・掃除  
↑何を説明するか  
↑キーワード

説明  
最後に、甲斐川さん、お願いします。  
はい、ぼくは「盆踊り」について説明します。

Q 盆踊りは何のためにするのか。  
A 一先祖霊・この世の人・阿婆参り  
↑何を説明するか  
↑キーワード

7 司会 これで私たちの発表を終わります。礼。

あいさつ  
明ら参りのあそび

送り火  
フリップ

資料(葉書、寫真等)  
の表示  
※わらややくすり  
工夫を

お盆参り  
フリップ

次にやることを明示

盆踊り  
フリップ

あいさつ  
きりばり

## 「和のこころ」発表のための話し合い

氏名( )

1. 司会 それではこれから話し合いを始めていきます。よろしくお祈りします。

2. みんな よろしくお祈りします。

3. 司会 今回、話し合うことは三つあります。

4. 司会 二つ目は、何を説明することの内容(順序を決めたり、フリップの目)を決めたりします。

5. 司会 三つ目は、発表会の時のプログラムを考え、分組も決めます。

6. A 時間のことを考えると、今日は二つ目まで話し合えると思います。

7. 司会 では、一つめの議題、「何を説明するか」を話し合います。

8. C Aさんから順に言っていくと、思うことを三つずつ書かせて下さい。

9. 司会 ぼくは、「お盆の「送り火・迎え火」と「盆踊り」、それに「お盆参り」がいいと思います。

10. D そうですか。それでは、Cさん、どうぞ。

11. A はい、私も全く同じです。これで、完璧！

12. D では、Dさん、どうぞ。

13. A ぼくも同じなんですけど、何だか時間が足りなくなるような気がします。だから、最後の「お盆参り」をやめた方がいいと思います。

14. D なんだでだよ。「お盆参り」がおもしろいんじゃないか。大丈夫って、心配すんなよ。「お盆」がくつちや盛り上がるからいいし。

15. A そのじゃなくて、時間のことを書けるんだよ。それに、説明するのになんでお盆がくつちや盛り上がるんだよ。

16. D おまえねえ、大事なことは何かって、盛り上がりなんだよ。大体ね、おまえはいつもそうやって人の考えにケチつけて喜んでるんだよ。小学校の卒業を祝う会の時もそうだったよな。

17. 司会 なんだって！おまえこそ、いつもそうやって、

二人ともやめて下さい。今は説明することを決めているんだから、関係ないことは話さないでください。

では、Dさんの発言もありましたが、時間のことを考えて検討したいと思います。どうですか。

では、とりあえず、全部やることにします。いいですね。

では、次に、二つ目の議題に入ります。今決めた三つの項目について、一つずつどんな内容を説明するかを話し合います。どうですか。どんどん書ってください。

では、今日はここまでとします。

次の話し合いは、発表会の時のプログラムについてです。

お祈りします。

あいさつ  
(明らさわやかに)  
議題を知らせる

発言のルール  
時間への配慮

話し合い  
修正

今までの話し合い  
をまとめる

議題、話し合う内容

確認、あいさつ

# クジラの飲み水

クジラはどのようにして水を得ているのであろうか

おまけ↓

**Q7** 塩分の濃い海水を飲むことはできるか?

**A7** × できません。

**解説** クジラの体には、海水を淡水に変えるような体のはたらきは備わっていない。つまり、陸上に住む哺乳類とほとんど変わらないため海水は飲めない。

**Q2** 自分の食物から、水分を得ているのか?

**A2** × 得ていない。

**なぜ?** クジラの食物に含まれる塩分の濃度が、植物とプランクトンなどとは違うから、クジラが食べるイカなどの体液は塩分の濃度が海水と同じだから、得ることはできない。

**Q4** 水分を有効に使うためにどんな工夫をしているか?

**A4** クジラは、余分な水分を排出しないようにしている。

①呼吸によって、水分は少ない。

②汗腺がないため汗から水分はほぼ排出しない。

③排泄によって失われるが、水分と同時に余分な塩分も排出できる!

**Q3** 自分の体で水分をつくることのできるのか?

**A.3** ○ つくる。

**解説** クジラが食物を食べ、エネルギーを作るときに脂肪などを分解する。実はこのときに水ができる。クジラはこの水を利用するのだ。クジラの食物には、大量の脂肪分が含まれ、蓄えられるため、食物を口にしないときも水を得ることができる。

## 大原海水浴場について

### ＜問い＞

初めて海に行ったのは、何歳か?

設備はいいのか? 1として、悪い場合は何歳か?

海が砂浜はきれいなのか? 1として、悪い場合は何歳か?

### 考えた問い

- どんな人が来ているか?
- 設備は、(きれいな)のか?
- どんな魚が泳いでいるのか?
- 人は多いのか?

設備	水	い	く	魚	物	落	す	あ	な	し	夏	浜	サ	原	す	み	私	月	浜	設	夏	し	な	な	海	私	大
備	が	す	こ	は	持	ち	ま	と	な	は	の	で	ら	海	ん	な	が	初	で	備	の	は	な	は	海	が	大
あ	り	る	い	い	て	て	ま	と	な	は	の	で	ら	海	ん	な	が	初	で	備	の	は	な	は	海	が	大
り	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る

